

## 第二回 第三次愛知県教育振興基本計画（仮称）検討会議 概要

日時：平成27年10月1日（木）午後1時から午後3時まで

場所：愛知県自治センター4階 大会議室

### 【基本理念とめざす「あいちの人間像」について】

#### <事務局>

- 本日御欠席の委員から、文書あるいは口頭でご意見をいただいているので紹介する。「基本理念が少し基本理念らしくない印象があるので、『子どもの可能性を拓く愛知の教育』としてはどうか。」という意見、2番目の【自分を生かす】について、「切磋琢磨」という言葉は、特別な支援を必要とする子、不登校・貧困など自分らしく生きることに関心のある状況におかれた子どもたちが増えていく社会の中で、この言葉は少しきついのではないかと印象があるので、『未知の課題を解決するため、協働性、能動性、主体性をもって』と改めてはどうか。」という意見、『社会をつくっていく』の『つくる』を漢字で表記してはどうか。」という意見、3番目の【学び続ける】に関して『心の育成』に関する表現がないので、例えば、『健やかな体と豊かな人間性を基盤として、生涯にわたって学び続ける人間』としてはどうか」という意見があった。

#### <杉山委員（名古屋市立白鳥小学校教諭）>

- 【自分を生かす】の「切磋琢磨」という言葉が、協調性とか協働性とか、そういうものと相反するようなイメージがある。資料の下の文面にある「自分の力を高め発揮し」などの言葉を生かした方がしっくりくる。
- 【あいちを創る】について、愛知県は農業も盛んだということもあって、愛知の特色の一つ加えるという意味で、「伝統文化・産業」という言葉を加えた方がいい。また、「新たな価値を創造する」とあるが、創意工夫しながら新たな価値を創造するという過程が重要だということを踏まえ、「創意工夫しながら新たな価値を生み出す」と変更した方がいい。

#### <白井委員（愛知教育大学理事、地域連携センター長）>

- 全体にちょっと長いと感じる。まず、最初の【共に生きる】の部分の「多様な他者の存在を尊重して」は、外国人の児童生徒だけではなくて、障害のある人々のことも視野に入れていく必要があることを考えると、「かけがいのない命と人権を大切に、共に生きることのできる人間」ぐらいにしてはどうか。多様な他者という言葉はなかなか一般的には分かりにくい感じがする。
- 【自分を生かす】の中の「切磋琢磨」という言葉には私も引っかけた。自分を生かすという視点ならば、「学びを生かして、未来を切り開き、社会を創っていくことのできる人間」の方が県民には分かりやすいのではないかと。
- 【学び続ける】のところは、全部を逆にしたらどうか。「学び続ける」が核になっていけば、「生涯にわたって学び続ける」と「健やかな体をつちかう」をひっくり返した方がより強調されるのではないかと。

<土井委員（特定非営利活動法人多文化共生リソースセンター東海代表理事）>

- 【共に生きる】の部分について、「多様な他者」というところに関して、外国にルーツを持つ子どもたちやLGBTの子どもたちは、むしろ自分の中の多様性ということにすごく葛藤する。そういうことを考えると、「命を大切にし、自己や他者の多様性を尊重して生きる」というようなイメージで、必ずしも他者に限定しないということを考えた。

<國枝委員（名古屋大学理事・副総長）>

- 意見が集中している「切磋琢磨」のところで、「協働性」、「主体性」という言葉は残すと、「自らの力を生かして」の部分はなくともいいのかもしれない。あとは、「産業」という言葉は、あまり入れたくないと思う。以前、県立高校の基本計画の中で、モノづくりの精神を生かしてと書いたときに、これを読むと企業のために教育をするのかというリアクションがあった。産業に関しては、モノづくりという言葉を入れただけでも、ちょっと反発がある。

<中野委員（愛知淑徳大学文学部教育学科教授）>

- 「切磋琢磨」については、これからの社会は大変だということもあって、自分たちでしっかり、お互いに頑張っていかないと、という意識を踏まえた表現であると思う。それから、「他者」という言葉の中には、いろんな国との交流や、価値観の多様化が進む中での、「多様」という意味合いも含まれている。「生涯にわたって」というところは、生涯にわたって学び、体も心も生涯にわたってつちかっていくという意味で、「生涯にわたって」が頭にきたというわけである。

<犬塚委員（特定非営利活動法人キャリアデザインフォーラム代表理事）>

- 「切磋琢磨」という言葉を残すか、改正するかはお任せするが、やはりグローバル化と言う以上は、切磋琢磨は余儀なくされている。産業界に入ると、切磋琢磨しなければ生き抜けないという現状もあるので、言葉がきつく聞こえるというのであれば、表現を変えてこの趣旨を残していただきたい。
- 「ともに生きる」のところは、自分と他者を大事にするということであれば、「自他の命を大切に、多様性を尊重して」にすれば、字句も短くなるし、皆様のおっしゃる趣旨が入れられる。それから、「生かす」は「生」なのか、活用の「活」なのか、これも検討の余地がある。また、「自らの力」の「力」を取ってはどうかというご意見があったが、産業界では能力を踏まえてキャリア開発をしているので、「力」という言葉を残していただきたい。
- 「自分を生かす」のところは、「つくる」を漢字にするのか、「築く」にするのか。子どもたちが読む可能性もあるので、分かりやすさを優先するのであれば「つくる」なのだろうが、もう少し、主体的につくっていくんだ、というニュアンスを入れるのであれば「築く」という方がいい。
- 「学び続ける」のところ、「生涯にわたって」の後に「、」を入れるだけでも変わる。また、「健やかな体」ではなく、「健やかな心と体」というふうには、「心」を入れるといい。
- 「あいちを創る」のところ、「伝統文化」なのかと言うと、私は「伝統と文化」ではないかと思う。「産業」の言葉を入れるか入れないかはお任せするが、「ものづくりの精神を継承し、新たな価値を創造する、または、生み出す」というところで、産業のことも入っているので、これは削って

もいいのかもわからないが、「伝統文化」なのか「伝統と文化」なのかはご検討いただきたい。「伝統文化」を継承するのか、「伝統と文化」を継承するのか、随分意味が違う。伝統文化のみならず、愛知の文化、現在の文化も大事にするということを入れたい。

#### <鈴木委員（愛知県立長久手高等学校教諭）>

- 切磋琢磨という言葉はどうするかというところで、グローバル化の中で、どうしてもそういう競争は避けられないという話もあったが、グローバル社会の中で生き抜いていく、勝ち残っていくというのは、ほんの一握りのトップエリートということではないか。言葉についてはお任せするが、トップエリートを育てるだけではなく、どの子もきちんとした、生きていくための学力であったり、教育といった視点が欲しい。
- それから、これからの時代は平和を望むというか、平和を守っていくということが、教育の中で必要であると思うので、言葉を入れるかはともかく、そういう視点での議論があればいいと思った。

【基本的な取組の方向1「個に応じたきめ細かな教育を充実させ、一人一人の個性や可能性を伸ばします」について】

#### <事務局>

- 欠席された委員からは、経済的な支援が必要な家庭が増えるなど、様々な事情を背景とした学力格差が生じている。やはり、学力の底上げの部分に力を入れてほしいという意見、(1)の施策例に「幼児の発達や心理に配慮した教育課程の編成と研修の充実」という施策を入れたらどうかという意見、「(3)特別支援教育の充実」に、「乳幼児の発達に関する専門家の充実」、「幼稚園・こども園・保育所との連携体制の構築」といった施策例を加えたらどうかという意見、同様に、幼児期の特別支援教育を含めて考えてほしいという意見、私立幼稚園、認定こども園、保育所も研修等を共にして、切れ目のない支援が目指せるとよいという意見、大学におきましても、障害のある学生さんと教員、大学を結ぶコーディネーターの設置など、障害のある学生さんの修学支援の対策が必要なのではないかという意見があった。

また、「(7)日本語指導が必要な子どもたちへの支援の充実」について、具体的な取組として、県立大学と県教育委員会が連携して、日本語指導が必要な児童生徒が散在して、学校教育現場において学校生活適応指導や日本語指導などが十分になされていない地域にモデル校を設置して、日本語初期指導教室を設置・運営してはどうかという具体的な提案もあった。

#### <國枝委員>

- 重要なことは、切れ目のない教育体制ということではないか。そこが愛知県の場合には、課題だと思っている。高校教育が県の指導である、中小が各市町村ということになって、そのことでつながりがうまくいっていないのではないか。幼稚園や保育所と小学校のつながりのところも同じように、縦のつながりが必要ではないか。高校の場合でも、過疎地域における中学・高校一体となつてという話が聞こえているが、そのような縦の連携について、どこかに書いていけるといい。
- インクルーシブ教育という言葉にあまり馴染みがないが、どういう内容か教えてほしい。

<鈴木委員（愛知県特別支援学校長会会長）>

- インクルーシブ教育システムというのは、障害のある子もない子も同じ場所で教育を受ける、地域の子は地域で育つというのが基本理念である。障害があっても同様に同じ場所で、地域の子と一緒に教育を受けることができるようなシステムをどう構築していくのか、というのが基本理念であるが、現状を見ると、施設整備の問題一つを取っても、車椅子の子が今の小中学校へ通学するというのは難しい問題がたくさんある。
- 特別支援学校が地域のセンター的役割を担って、各地域の小中学校を支援するということで進めているが、とにかく進めなければ進んでいかないので、小中学校の特別支援教育の充実をもって、今、特別支援学校に通学している児童生徒が、地域で少しでも受け入れられるような体制を作っていくということである。

<高橋委員（愛知県公立高等学校PTA連合会会長）>

- 一般の社会の保護者に、この英語の言葉で通じるのかと言うと、ちょっと。

<鈴木委員>

- 逆に言えば、ここでうたっていない限りは皆さんに広がっていかない。そういう意味でも、ここに載せていっていただきたい。

<高橋委員>

- ※印かなんかで補足をつけてはいかがか。

<國枝委員>

- 言葉の意味についての注釈を、欄外に書くということを検討していただく。

<白井委員>

- 三点お願いしたい。ひとつは特別支援教育の充実の中で、幼児期に早期発見することによって、発達障害の子どもたちが、より小学校に入っていくやすくなっていく。その部分が、非常に重要なので、是非書き込んでいただきたい。
- 二点目は、日本語教育が必要な子どもたちへの支援の充実ということで、いろんなことをNPOとか、大学の方でかなりやっているの、そういった大学との連携ということも、是非書き込んでいただきたい。
- それから（6）のICTであるが、（9）で情報モラル教育の充実というのがあるが、これは道徳と両方でやっていかないと、これだけ大きな問題になっているので、道徳の方だけで情報モラル教育の充実だと、ちょっと弱い感じがする。是非、（6）の方へ、現在の学習指導要領上はICT教育の充実の方で書いていると思うので、両方で再掲していただくといい。

<鈴木委員>

- （1）の全国学力・学習状況調査の活用という部分であるが、例えば大阪が高校入試の内申点に使うというようなことを発表したが、大村知事はそれには反対ということだと思う。どのように活用していくのかということが分からないので、質問も兼ねてであるが、過度の競争につながるということで、ちょっといかがなものかなと思う。

- (2)の総合学科の新たな設置という部分だが、確かに総合学科の持つ役割として、普通科ではない生徒達が、いろいろ自分の進路実現に関するしっかりした考えを持っていたり、総合学科で生き生きと学べると言う例を聞いている一方で、進学をするにしても就職をするにしてもどちらも中途半端であるということも聞いている。また、現場の教員にとっては負担が非常に大きいという現実もあり、総合学科なら全てバラ色というわけではないので、その辺を考えていただきたい。
- (5)の理数教育の推進だが、理数だけを推進していくというのはちょっといかがなものかなど。もちろん、そういった部分は必要であるとは思いますが、個別のことについてあまり大きく取り上げるのはいかがかなと思う。
- (8)の貧困の子どもたちへの支援だが、所得が低い家庭の子どもについては、無償となっているが、手続きが非常に煩雑で、例えば外国人の家庭の子どもだと、親が書類を提出する場合にもなかなか理解ができず、本来なら無償が受けられる生徒が受けられないで授業料を払わなければならないということもあるので、以前の全部、高校無償化に是非戻していただきたいというのが私どもの要望である。もちろん国の施策なので、愛知県独自にはなかなか難しいかもしれないが、教育予算をもうちょっと充実させてもらって、事実上無償化できるというようなところがほしい。

#### <國枝委員>

- 具体的に詳細な要求をここに書くわけにはいかないのですが、そこまで書くことは多分できないのではないかと。理数教育の推進が特出しされているのは何故かというご指摘についての私の理解は、この分野は非常に速くどんどん進んでいくので、そこにキャッチアップしていくためには、いろんな力を入れて高校の理数教育に、大学の力も少し入れたりして、強化していくことが必要だということかと思う。

#### <柴田委員（名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育科学専攻教授）>

- (1)と(6)に関して、少し概念の整理が必要と感じた。(6)のところに、情報教育(ICT)が入っているが、ICTを活用して、「わかる授業」とか教科の方の活用にもし広げていくのなら、情報教育という概念に収まりきらなくなるので、注意が必要である。現行の学習指導要領のもとでも、教育情報化というキーワードの中に、教科の中でのICTの活用ということと、情報活用能力を中心とする情報教育、それで情報教育の中に、情報モラルとか、情報化の科学的な理解とか、そういったものが入ってきているので、そのあたりの整理が必要である。
- 同様に(1)のところであるが、アクティブ・ラーニングによる「わかる授業」とあるが、アクティブ・ラーニングが必要とされている背景というのが、教科の深い理解ということと同時に、総合的な問題解決能力をはじめとする論理的思考力やコミュニケーション能力など、教科を通して、教科を超えた汎用的な力を身につけるといっても入っているので、「わかる授業」と「個に応じたきめ細かな指導」という中だけに収まりきれないかもしれない。先ほどから議論になっていたところで言うと、主体的な学びとともに、協働的な学びということ、それから現実的な問題解決に近い状況で学んでいくということがアクティブ・ラーニングで期待されているので、概念の整理が必要かと思う。

#### <中野委員>

- アクティブ・ラーニングというのは個人が積極的にやっていくだけではなく、自分の考えと他者の考えといろいろ比較しながら自分の考えを伸ばしていく、それがアクティブ・ラーニングに入っている。だから、お互いがやっぱり考えを出し合って、そして高めていくというのがアクティブ・ラーニングである。だから他者の存在とか、先ほどもありましたように、やっぱりもう自分だけではない。そういうことをこれから考えていかなければいけない。

#### <土井委員>

- 前回の計画では、「多文化共生社会の実現に向けた教育の推進」があったが、今回は多文化共生という言葉が一切そこから抜けている状態である。そうすると、単純にぱっと見た瞬間は多文化共生というのが、この愛知県教育振興基本計画から言葉としてもなくなった。前はあったのにカットされたと思われてしまうと、ちょっと難しいのかなと思う。

自分もこの中でどこに位置付けられたらいいかわからないが、どこかにその言葉を1つ入れておいていただきたい。必ずしも多文化共生というのは、外国籍の子どもたちの言葉の面での支援だけにとどまらない領域なので、「日本語の指導の必要な・・」ということだけに集約されてしまうとこれは多文化共生から大きく外れてしまうなという感じがする。

【基本的な取組の方向2「人としての在り方・生き方を考える教育を充実させ、道徳性・社会性を育みます」について】

#### <事務局>

- 欠席された委員からは、自己肯定感が子どもたちが低いという調査結果があるということで、「自尊感情の育成」というのを柱立てにどこかに入れてはどうかという意見、不登校問題ということでカウンセラーの配置・拡充であるとか、私学さんの方でやっている取組で福岡県の方で不登校の子どもたちを私学協会の中で組織を設けて不登校支援をやっているという事例の紹介、不登校の受け皿として1番目の(2)にも関連するが、県立の高校で定時制ではなく全日制・単位制の学校をつくってそこで少しゆるやかな形で不登校の子どもたちを受け入れるというような学校があってもいいのではないかなという意見などをいただいている。

#### <中西委員(愛知県専修学校各種学校連合会副会長)>

- 不登校の子ども達に関わる学校については、全日制・単位制のもろもろ、これに関しては全国で、もうあらゆるところで、愛知県も含めてすでにあるので、公の機関で特別にやる必要性があるのかどうか。仮にこれがまだ周知されていないということであるならば、そこはしっかりと周知していかなければいけない。

#### <高橋委員>

- カウンセラーの部分で、PTAの関係で、学校の先生にカウンセラーの状態はどうかと話す機会があったところ、全体的にやっぱり足りないと言われた。現在子どもたちが抱えているのは、原因が特定されているものだけではなくて、いろんな原因が多様化していて、なかなかスクールカ

ウンセラーの先生の1回だけとか、またそれだけでは対応が難しい、というのがやはり現場の校長先生もそうであるし、スクールカウンセラーもそうである。学校によっても、地域によっても大きく変わってくると思うが、スクールカウンセラーについては、しっかりと充実していただきたい。

#### <中野委員>

- できるだけ不登校が起きないような体制づくりが重要だと考える。スクールカウンセラーの充実が言われているが、それだけではなく、スクールソーシャルワーカーであるとか、チーム全体で対応するという形でできているので、カウンセラーの配置だけではなくて、いろんな人の力を借りることも考えながら、カウンセラーの配置も考えていくことが必要である。カウンセラーだけ入れても、どうしてもいろいろとカウンセラーと他の先生との関係が難しい場合もある。

#### <高橋委員>

- 学校にそれでもなかなか行けない子に対してフリースクールとかがあるが、そういう中での連携という部分もあるのか。

#### <中野委員>

- 地域の中の「子どもセンター」のようなところにカウンセラーの相談員を置いたりして、先生も忙しいので、地域と連携しながら情報を共有していくことについて、市町村ではいろいろと取り組んでいる。一番大事なのは、そういうことが起こらないように先生にずっと相談できるようにすることである。だから、先生のカウンセリングマインドが今、求められている。先生自身にまずお話ができるようにしていくことが、第1歩だと思う。

### 【基本的な取組の方向3「健やかな体と心を育む教育を充実させ、たくましく生きる力を育みます」について】

#### <事務局>

- 欠席された委員からは、(13)のところに「子育て相談に応じる人材育成と幼稚園・こども園・保育所への配置」という施策を講じたかどうかという意見、あるいは教育の基本は家庭にあること、このことをもう少し県民に訴えてもいいのではないかという意見、(14)の施策例として、保育者の配置の充実や、多様な年齢の保育者の再雇用といった意見、それから小学校との連携強化という記載があるが、幼児期と児童期が接続していることに理解が深まり小学校教育と幼児期の教育の質が双方に高まることを期待している、という意見をいただいている。

<※出席委員からは、特に発言なし。>

### 【基本的な取組の方向4「未来への学びを充実させ、あいちを担う人材を育成します」について】

#### <事務局>

- 欠席された委員からは、(19)のところのグローバル化ということで、愛知県がすでに実施しているスーパーイングリッシュハブスクールの事業等と高大連携ということで、県立大学としても引き続き協力していきたいという意見をいただいた。

#### <國枝委員>

- 国際化というのは、全体の大きな背景だと思うが、「取組の柱と施策の展開」を見ると、グローバル化への対策というのは、1（4）「外国語教育の充実」と、4（19）「環境教育・ESD・グローバル化への対応の推進」の2つだけなのか。多文化の理解やESDというのも必要だが、施策例としてユネスコスクールとかグローバル人材事業とかが、少し並んでいるだけであるため、もう少し一般的に書いたほうがいい。

#### <事務局>

- グローバル化については、4（19）に記載しているが、多種の項目に関わっており、外国語教育や日本語教育、日本語指導が必要な子どもたちの存在、それから、オリンピック・パラリンピックやキャリア教育においても、それぞれの施策の中に書きこむことができる内容だと考えている。
- グローバル人材育成事業では、語学の教育だけではなく、高校生を海外に派遣することを含めて取り組み、促進を図っている。高校生海外チャレンジとして、2～3週間自分自身で企画立案させ、良い案には海外渡航費などを支援するとか、職業課の高校生をインターンシップという形で海外へ派遣したり、他にも、海外の高校と姉妹校提携を結んだりしており、多様なことをやっているの、今後どうやって充実させていくのかについて、この中で書き込んでいけたらと考えている。

#### <中西委員>

- 専門学校を含め、外国語を学んでも海外に行きたがらない子が非常に増えてきているということがある。そのため、小学校からの部分だけでグローバル化を叫ぶのではなく、幼児期も含めて、外へ出て外国語を学ぼうだとかいう、チャレンジするような精神的なものをもう少し掘り下げて表現するとよいと思う。
- 私どもの専門学校でも高等学校で企画させて社会の現場に出ている学生をお預かりしているが、お菓子を学びたいということで、非常に前向きであり、世界大会にも出る生徒もいる。このように、大学だけでなく職業というところにも、少しずつ取組の効果が現れ始めていることを報告させていただく。

#### <國枝委員>

- 様々なところで様々な努力をしておられるということはよく分かるが、全体のバランスを見たときに、「あいちグローバル人材育成事業」の中でそれを読み取れといわれても誰にも分からないと思う。この事業は高等学校が主な対象ということだが、先ほど指摘があったとおり、成長段階の早い時期から海外の人たちに目を向けるという流れもあった方がよく、グローバル化の流れの中で、小中では、具体的に海外から来た生徒の受け入れや海外への派遣といったことを通して、多文化の理解などに取り組んでいるといった具体的な記載がもう一行あってもいいのではないかと思う。

#### <犬塚委員>

- それに関して、4つほどアイデアがある。1つ目は産学行政連携のグローバル人材育成センターというような公営で、設備などを必要としない組織を作ってもいいのではないか。京都ではNPOが実際に運営しており、その中でアクティブ・ラーニングの取組みもかなり行われている。そちら



は京都産業大学内に事務所を置いており、決して立派な施設が必要というわけではないので、そういう組織をまず立ち上げては如何か。

- また、大規模公開オンライン講座（MOOC）が非常に盛んになっている。ハーバード大学とMITの共同講座を私もいくつか受講しているが、英語でしか受けられない。英語で受けることで英語の勉強ができるのも悪くはないが、一方で、この講座では、日本語翻訳のボランティアを募集していて、こういうボランティアに、大学の先生のみならず学生さんが関われば、英語をきたものとして活用することもできる。県が主体となって、いくつかの優秀な講座を翻訳してデリバリしていく新しいシステムを作ってもいいと思う。そうすれば1（1）、（2）、（4）、（6）にも関わる施策になるだろう。
- 二つ目は、外国人の方に日本語を教えるだけでなく、日本人の子どもにももっと日本語を教えるべきだと思う。若い方から中高年までのセミナー講師をしていると、自分の考えをきちんと伝えられるという人が少ないと感じる。こういう状況ではグローバル化は難しく、まず日本語で語れるようになることが必要である。外国人の子どもに日本語を教えるだけでなく、外国人の子どもに教えながら日本人の子どもも日本語を学べるような、そういう学習の仕組みが必要かと思う。
- 三つ目は、カウンセラーが単独で活躍するのではなく、ソーシャルワーカーやキャリアカウンセラーと、先生方と連携した、カウンセリングチームが必要となっている。その中へ、家庭を巻き込んでいく、PTAの方も巻き込んでいく。そこを入り口にして、家庭へのキャリア教育のみならず、子どもたちのしつけも含め、教育の基本は家庭にあるという考えを広めていけるのではないか。
- 四つ目はグローバル化に戻るが、インターナショナルスクールを県営で行ったらどうか。これは日本では初の試みになると伺っているが、様々な組織を運営する中のひとつとしてでも構わないので、チャレンジする価値はある。グローバルな人材を育成するセンターを立ち上げ、その中で色々な施策を打っていくと、グローバル人材の育成に力を入れている愛知県という県のイメージを創り、PRできると思う。

#### <國枝委員>

- （20）のオリンピック・パラリンピックの生かし方と書いてあるが、教育の中でどういうことができるのか。文科省はオリンピック・パラリンピックそのものの理解をせよ、とは言っているが、これを本当にどう生かせるのか。

#### <中野委員>

- この前の教育懇談会で、子どもの体力が低下しているなかで、オリンピックの開催を機会として、その中でも活躍できる人も育てながら、子ども全体の体力向上を図ることが話題となった。学校教育や地域のスポーツの活動を支援していくことを含めてのことだと思う。

#### <國枝委員>

- 資料にも、健康増進やスポーツの効果と記載されているが、もう少しいいアイデアが欲しい。

#### <鈴木委員>

- キャリア教育の推進については、まず受け入れる職場が少ないということが一番の大きな問題で

あるので、企業に門戸を広げていただくことが必要かと思う。また、商業高校の就職が良くないことも問題である。実際の商業に関係するところに、たとえば事務という職種での就職はなかなかできず、介護などの職種で就職ということにもなっている。専門高校にもキャリアカウンセラーを専属に配置して支援していただくことが必要ではないか。

#### <山本委員代理（愛知県経営者協会 企画・海外グループ部長）>

- それぞれの地元の中小企業の方は将来を担ってくれる人がほしいと思いつつ手が回らないという実態はよく聞いているが、教員が忙しい時にそれぞれにあたって受け入れ先を探すというのもこれまた大変難しい話かと思う。

#### <犬塚委員>

- 文部科学省の事業で大学生が企業と一緒に商品開発を行うというプロジェクトが進んでいると聞いており、高校でも農業高校では食品関係の会社様とご一緒しているという事例もあるので、教えてもらうだけでなく学生達の新しい視点を活用したいという企業と上手にマッチングしていく仕組みが必要ではないか。

例えば、プロジェクト型の職業体験をアクティブ・ラーニングの一つとして位置づけ、生徒を受け入れるとうちの会社でもいいことあるよということをPRしていけたらいいのではないかと思う。

#### <國枝委員>

- （18）の施策例に「固定的性別分担意識にとらわれない勤労観の育成」とあるが、**社会に女性の活躍の場を広げていくということをどこかに書き込んでほしい**という宿題の答えがこれだと思う。教員は女性が割と多いとは思いますが、例えば、理系の会議では全部見ても3人4人という状況である。それは能力の問題ではなくて、男性の女性に対する、先ほどの議論の**他者の理解**という意味でも、決して女性の問題ではなく、男性がそういうことを理解するということが醸成されないとなかなか進まないのではないか。
- あとは、「**固定的性別分担意識**」という言葉について、もう少しこなれた言い方があるのではないか。愛知県としても、女性の副知事がそういうことをリードしていくと公言していたので、この中にもそういう精神を盛り込んでいただきたい。宿題のハードルをひとつ高くしたのでよろしくお願したい。

### 【基本的な取組の方向5「学びがいのある魅力的な学校教育を進めます」について】

#### <事務局>

- 欠席された委員からは、教員の養成については公私にかかわらず重要であり、私学においても民間への派遣研修等の取組を行っている学校もあるが、**特に英語等、公立で実施している教科別の勉強会に私学も参加させていただくとか、そういった形で教員の研修についての連携をしていくことができないか**という意見、それから愛知の教育について、県内の小中高と大学等の幅広い連携で行うために連携体制を明確に構築してモデルケースとしてケースごとにアピールできるようにし

ていくべきであり、そのためには県教委・市教委・大学を含む各学校がそれぞれの窓口を明確化し連絡できる体制を整えてはどうかという意見をいただいている。

- また、愛知県立大学の人見委員からは、(26)の大学等高等教育の振興に関して、県立大学として特に(7)の日本語指導が必要な子どもたちへの支援や、(19)のグローバル化ということについて、愛知県の教育に貢献していきたいという思いがあるので、必要な施策について協議していきたいというお考えが示されている。

#### <白井委員>

- (23)の「教員の養成・採用・研修」と「多忙化解消への支援」が同じ柱にあるが、これに違和感がある。まず、教員の養成・採用・研修を一本にして一元化の推進とする。それから、(24)「地域における学校支援の仕組みづくり」があるが、地域ではなく学校で多忙化が進んでいるので、それに対する学校支援の仕組みづくりとして、先ほど触れた専門スタッフ「チーム学校」のスクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカー、ICTの支援員の拡充の問題と、もう一方では地域の人との協働というコミュニティスクールといった、開かれた学校づくり、そういった部分としての学校支援の仕組みづくりという形の方がおさまりがいいのではないか。

#### <杉山委員>

- 多忙化解消のところに関しては私もまったく同意見で、逆にいうと多忙化解消への支援は取組の柱になっているにもかかわらず、施策が同じ言葉が使われているということで、(24)に入れるというお話もあったが、私は別に取組の柱として多忙化解消の支援というのを入れて、施策のほうにチーム学校など、教員を支援する施策を加える。皆さんで相談できる体制もそうであるが、校務支援の充実とか教育関係団体の情報の共有とか、もうちょっと多忙化解消の支援に関する具体的な施策をあげていただきたい。
- もう一つ、5のタイトルそのものであるが「学びがいのある学校づくり」というのが、文章の中を見ても「学ぶ意味を感じられる学校」という表現がしっくりこない。それならば、「教育環境を充実させ、魅力ある学校づくりを進めます」とはっきりとうたったほうが分かりやすい。

#### <國枝委員>

- 学ぶ喜びというのは、学ぶモチベーションがあるかないかのすごい差がある。目的意識を明確にして勉強できることと、それが学ぶ喜びと学ぶ意味を感じられるということと、「学ぶ意味を感じられる学校」としてここに書かれている内容が、先生に関することが多いので、そのつながりが悪いのかもしれない。
- (23)のところ、大学との連携については色々あるが、支援の案件においては、企業からの協力というのも書き込まれた方がいい。大学には企業の方に色々講義していただいて、色々な指導をしていただいているので、ある意味ではインターンシップにつながっていくような話である。

#### <中野委員>

- 魅力ある学校づくりについて、学校サイドでいろいろ発信できるような魅力づくりを学校自身が

つくっていくようなことができないと、なかなか難しいのではないかと考える。学校の中でどのくらい独自性、公立学校はなかなか難しいというのもあり、それは私学がいろいろやっているわけではあるが、公立の中でも特徴を出せるような形での学校づくりが推進できるような施策があると先生方の目の色も変わってくるのではないかと。

#### <國枝委員>

○ この項目については、高校教育が主体で書いてあるが、小学校や中学校の先生の見解はどうか。

#### <加藤委員（愛知県小中学校長会会長）>

- 小中学校の場合、市町村がまずあるので、県の施策ということではなかなか難しいと思う。全体についてであるが、やはり小中学校では、基本は全員子ども達に対するものということと、市町村が中心にやっているということがあるので、内容的に施策の例の中に出てくるものについて、県が一生懸命推進しようとしても、なかなか市町村が動かないということも出てくるのではないかと。
- 例えば、1番の（6）なんかも情報（ICT）教育の充実ということで、施策の例としては、情報活用能力の育成ということで。果たして、それだけで本当にこれをやろうとしたときに小中学校の場合どうなるのかなと思う。もう少し施策の全体の中身として、市町村への支援というものが浮き彫りになるような形のものが、特に小中をターゲットとしているような取組の柱であれば、そういうものが是非たくさん出てくるとありがたい。

#### <國枝委員>

○ 全体に県から直接小中学校に対してなにか支援をできるわけではないが、今言われたICTに関して言うと、外国の場合だと中学校ぐらいでもどんどんICTの設備が入っていたりする。市町村の経済状況もあって、できたりできなかつたりするかもしれないが、せつかく今、愛知県の全体の教育を振興しようという時なので、そこはつながっていないと議論したことがすべってしまう。

#### <加藤委員>

○ そういう意味ではない。ここに出ているものがどうだということではないが、要するに市町村を刺激していかないと、結局それが愛知県全体としては充実したものになっていかないと。ICTもそうであるし、日本語教育が必要な子どもたちの支援についても、本当に今、完全に市町村が主導してやっている。こういうものについても、県でいろんな施策により支援していただけるということになると、県全体の動きになってくると思うので、そういう意味合いである。

#### <中野委員>

○ 私は市町村レベルでそれぞれ特徴があるし、その特徴を生かす形での学校づくりというつもりで言ったのだが、それを県として支援していくということが、今のご意見だと思う。とにかく、先ほどのICTでも、他の学校みんな同じように入れてもどうしようもない面もある。あるいは、外国人の子どもの場合、地域によってもものすごく多い。そういう地域差があるところに、その学校がどのように取り組んでいくかというところで、学校の特徴を出しながら、それを県として支援できると意味があるのではないかと。

#### <國枝委員>

- もともとこの委員会の目的になるが、県が司っている高校教育だけではなくて、小中学校、もしくは幼稚園とか保育園まで含めて、愛知の人づくりということで議論してきたつもりである。これが県の及ぶ範囲内だけで止まっていたのでは議論した意味がないと思う。どういうふうに県から市町村に、こういう柱で愛知県としては考えていると伝えていくのか、それを市町村と一緒に動いてくれるのか、それとも聞きましたというだけなのか。

#### <事務局>

- 私達もこの計画を作るにあたって、市町村の皆様のところは何度か伺い、県がこういうプランを作ったときに、市町村としてどのように御活用いただけるかというお話をしてきたが、自分のところでやりたい方向が県の方向と合致していると、市町村の中を動かすための良い追い風になるという話を伺っている。直接的にお金で流す、という手法もあるかと思うが、それについてはなかなかお約束できることでもないので、追い風、旗振りの一助としたいということで、県内の市町村のご理解を得て、この計画を作りあげてまいりたいという思いである。
- 権限は別々であるが、想いは一つにして、それでその想いのもとに、やることについては、県の立場でやること、市町村の立場でやることは違ってくるが、想いは一つにして、同じ方向に向かうようにというような形で私共これまでも進めてきているし、これからもそういう形でいきたいということである。そういう考え方で進めていきたいと考えているので、小中のことも含めて、方向性について御議論をいただきたい。

#### <國枝委員>

- 計画ができたときにどのように外にアナウンスしていくかということで、例えばそういう市町村の教育長の方が集まれる会に、例えば私が行って、こういう議論をしたものをつくりましたと言って御説明するとか、もちろん県の教育長さんから御説明いただいてもいいと思うので、そういう場を作っていく必要がある。

#### <中西委員>

- 最後に、一点だけ申し上げたい。5の(23)のところの大学との連携のところ、ここに大学等と入れていただけるとありがたい。

#### 【今後の進め方】

#### <事務局>

- 本日、時間の関係で発言できなかった部分については、別途事務局まで御連絡ください。今日のご意見と、そうした追加の意見を踏まえ、座長、副座長に御相談する中で、第3回の検討会議の資料については、本冊に施策を入れたかたちでご提示するような準備を進めてまいりたい。

<以上>